

ゼミ論文

『東京都福生市と横田基地との関係から考える在日米軍基地との共存～文化的観点から～』

早稲田大学文化構想学部社会構築論系 4年

1T140594-7 鈴木遼河

目次	2
はじめに	3
<b>1章 研究について</b>	
1-1 研究目的	4
1-2 研究動機	4
1-3 研究方法	4
1-4 先行研究	5
<b>2章 東京都福生市と横田基地概要</b>	
2-1 東京都福生市概要	6
2-2 横田基地概要	9
2-3 基地をめぐる動き	12
2-4 軍民共用化	13
2-5 基地に対する人々のイメージ	15
<b>3章 福生市の基地文化</b>	
3-1 赤線	16
3-2 米軍ハウス	17
3-3 商店街	19
3-4 音楽	21
3-5 文化まとめとその他	24
<b>4章 沖縄の米軍基地</b>	
4-1 沖縄の基地文化	26
4-2 沖縄の基地問題と横田基地の比較	27
<b>5章 福生市の取り組み</b>	<b>30</b>
<b>6章 まとめ</b>	<b>33</b>
参考文献	36

## はじめに

私は生まれも育ちも東京都福生市である。この町はとても面積が小さいながらも、日本において、いや、世界においても重要なものを抱えている。それは、横田基地である。横田基地は在日米軍司令部がおかれる基地である。

物心ついたときからすぐ近くに存在していた横田基地に対し、私は何の疑問も抱かずに暮らしてきた。成長するにつれて、横田基地のような存在はどこの町にでも存在するものではないことを知った。さらには、基地のある沖縄では大きな反対デモも行われているのではないか。そこで私は疑問に思った。横田基地と国内の他の地域に存在する米軍基地とは何が違うのかということ。

私は福生市で育つなかで、町全体として、基地をネガティブにとらえるよりむしろ、ポジティブにとらえている雰囲気を感じてきた。それは、米軍基地が日本に駐在していることに対する善し悪しということだけでなく、基地というものに対し、いかに共存していくかということに、ポジティブに向き合ってきたのではないかと、ということである。横田基地に沿って伸びる国道 16 号沿いには、アメリカンなお店が立ち並ぶ。そして毎年 9 月には友好祭と呼ばれる、一般市民でも入ることのできる横田基地内のお祭りがある。このお祭りは毎年たくさんのお客さんで賑わっている。また、この異国情緒のある町には、多くの文化人が訪れてきた。反対デモもここ数年で初めて見ることがあっただけで、ニュースで取り沙汰されている沖縄の反対デモに比べたら小さいものである。

私はこの違いがなぜ生じているのかを明らかにしたい。この違いの原因を明らかにすることで、他の地域でも米軍基地とうまく共存していく道を切り開いていくことができるのではないかと、ということを明らかにすることが、本論文の意義である。

# 1章 序論

## 1-1 研究目的

本論文の第一の目的は、福生市にとって横田基地とはどのような存在なのかを明らかにすることである。基地が存在するという事は、騒音問題など、さまざまな問題が発生するという事だ。一方で、観光スポットとしてアピールしている側面もある。

第二の目的は、福生市や横田基地に対し、人々はどのようなイメージを持っているかを明らかにすることだ。福生市にはゆかりのある著名人が多々いる。その著名人たちのほとんどは生まれや育ちが福生だったわけではない。福生、あるいは横田基地の持つオーラのようなものに惹かれて福生を訪れていたのではないだろうか。外部の人々が持つ、福生と横田基地のイメージを明らかにすることで、他の米軍基地とその周辺地域との違いを明らかにする。

第三の目的は、米軍基地との共存方法を見つけ出していくことだ。基地反対デモが現在進行形で盛んにおこなわれている地域もあれば、デモはあまり行われない地域もある。ましてや、横田基地と福生市のように、文化として受け入れている地域もある。この、福生市における米軍基地の文化としての受容の背景は、米軍基地とその周辺地域の共存方法を考える糸口になると考える。

本論文では、米軍基地との良好な関係を保つための共存方法を模索するもので、日本に駐在する米軍基地に対し、反対か否かを論ずることはしない。

## 1-2 研究動機

ここ数年、沖縄では普天間基地移設問題をめぐり大規模なデモが行われている。ニュースの報道でも、沖縄の基地問題ばかりが取り上げられる。また、騒音問題だけでなく、米軍兵士による事件や、ヘリコプターなどの事故もたびたび報道される。それに対し、私が23年暮らしてきた福生市においては、そういった不祥事を聞いたことがない。この原因は一体何なのだろうか。福生市はむしろ文化として横田基地を受容していると考えられる。この福生市と横田基地の文化的側面こそが、米軍基地と周辺地域を良好な関係に導く鍵なのではないかということを探していきたい。

## 1-3 研究方法

まず福生市と横田基地が現在のような、ある種良好な関係であることの要因を追及して

いく。

仮説の一つ目として、福生市が横田基地をうまく受け入れた結果、現在のような関係を構築することができた説。

仮説の二つ目が、そもそも基地そのものが問題を起こすような基地ではないという説。

この仮説を考えていくために、福生市の歴史や地理など概要をまとめていく。その上で、横田基地が東京に置かれることになった経緯や歩んできた道のりを調査することで、福生市と横田基地がどういった関係性を続けてきたのかを考察する。

さらに、一つ目の仮説についての考察方法は次のようである。福生に文化として突如アメリカ文化が流入してきたとは考え難い。基地の存在によって何らかの影響を受けて、何らかの経緯をもってして福生独特のアメリカ文化が誕生したはずである。この基地からの影響や文化受容の経緯をさまざまな文献を通してとらえていく。また他の米軍基地周辺地域との文化の根付き方に違いなどないか比較も行っていく。

仮説二つ目に関しては、横田基地というものがアメリカにとってどういう位置づけの基地であるのか、また福生という土地にあることで問題が起きづらい、あるいは横田基地で働く軍人と沖縄などの問題が起きてしまう地域の軍人とでは何か違う点などないか、などをこちらも文献を通して考察していく。

最後に、福生市が横田基地と共存していくなかでどのような取り組みを行ってきたを調べていく。これをもとに、沖縄などの基地周辺地域が米軍基地と良好な関係を築いていける方法はないかを模索していく。

#### 1-4 先行研究

新井智一さんによる2005年『地学雑誌』に載せられた論文「東京都福生市における在日米軍横田基地をめぐる“場所の政治”」において、福生と横田基地の関係が緻密に紹介されている。ここでは、福生と横田基地の関係や、その関係性、つまり「場所の政治」の成り立ちについて述べられている。福生の概要や、横田基地の概要、または文化についても触れられているが、論点として挙げられているのは、「場所の政治」である。横田基地という制約をもたらす存在とともに、福生がどのように向き合い、そして発展してきたのかが論じられている。

今回筆者は、場所の政治には焦点を当てることはあまりしない。横田基地という存在によって、福生にはどのような文化が生じてきたのか。横田基地と福生の関係性を文化的観点から考察する。

## 2章 東京都福生市と横田基地概要

### 2-1 東京都福生市概要

#### (1) 沿革

福生周辺は昭和初期まで養蚕を主とした農村であったが、昭和14年から15年にかけて、市の東北部に旧日本陸軍の「多摩飛行場」が設置され、さらに航空審査部と整備学校等が設置されて人口も増えはじめ一躍軍都として発展してきた。横田基地の町というイメージの強い福生だが、元々軍にゆかりのある地であったと言える。

昭和15年11月には福生、熊川の両村が合併して町制を施行して福生町が誕生した。(昭和15年の国勢調査で人口7,921人)

昭和20年には終戦と同時に軍部の施設であった「多摩飛行場」は米軍に接收され、その後数度の拡張を経て現在の市域の約1/3を占める横田基地となっている。

戦後は米軍の進駐に伴い、基地労働者やサービス業関係者等が激増した。一般住宅とともに米軍人用の住宅ハウスが約2,000戸も建てられるなど、基地経済が発達し基地の町として、特異な発展をしてきたのが福生という街である。そして、基地関係者向けであった商店街は、基地関係者からの需要がなくなった後も発展を続け、現在にも残る福生にとって重要な存在となっていった。

そんな福生は基地以外の事柄にも力を入れている。「ふっさ七夕まつり」である。「ふっさ七夕まつり」の第1回目は昭和26年に行われている。商業の繁栄と観光を結びつけた催し物として地元商店街のひとたちが取り組んだものであり、以来、市をあげての一大観光行事となっている(8月7日前後4日間開催)。いつ頃からかは定かではないが、昨今ではこの祭りにおいてアメリカンな町というコンセプトが押し出されだされている。アメリカンブースなども設置されている。もともとはアメリカンな要素を前面に押し出すような祭りではなかったはずであるため、昨今のこういった風潮は、時代とともに横田基地を身近で親しいものにとらえていると伺える。

一方で横田基地とは共存をしながらも、昭和37年頃から基地の町からの脱皮が真剣に考えられ、同年に首都圏整備法による市街地開発区域の指定を受け都市計画を進めてきた。

そして行政サービスの一層の充実を図るため、昭和45年7月、地方自治法の特例措置により、人口38,749人で市制を施行し、東京都下18番目の市となった。

現在は、平成22年3月に策定した第4期総合計画において、目指すべきまちの都市像を

「このまちが好き 夢かなうまち 福生」と定め、福生の自然、歴史、文化、産業など、かけがえのない財産を資源として活用し、福生らしい個性と魅力、にぎわいと活気を生み出し、すべての市民が心から「住んでよかった」、「住み続けたい」と思えるようなまちの実現に向け取り組んでいるところである(福生市企画財政部企画調整課, 2016年,p.1)。

福生市は七夕まつりを置いても、昨今はアメリカンな町を強調しており、その様子は2017年福生市が発表した市のPR動画「What's Up FUSSA」を見ても明らかである。この動画は福生の町なみを映しながら、ラップで福生を紹介していくというものである。2017年はラップが一部の若者の間で流行したことも理由の一つであったであろうが、アメリカンカルチャーであるラップで福生を紹介していくというスタイルからして、アメリカンな町であることを強調したいことがひしひしと伝わってくるだけでなく、当然のように横田基地というものを受け入れているという様子も見て取れる。

## (2) 地勢および位置

都心からは約50Km西方にあって、多摩川の東側に南北に横たわる市で、近隣は、立川市、昭島市、八王子市、あきる野市、羽村市、瑞穂町、武蔵村山市に境を接している。この近隣の地域のほとんどが横田基地と接地している。全国的に見てもかなり小さい福生市の中で、横田基地の面積は福生市の約1/3を占めている。

## (3) 福生にゆかりのある著名人、作品(wikipedia 参照)

福生にはゆかりのある著名人たちが多く存在する。

- ・吉増剛造 - 詩人
- ・村上龍 - 小説家・映画監督
- ・中西悟堂 - 詩人・歌人・日本野鳥の会創立者（終戦直前に田村酒造の一角に間借りし「野鳥村」の建設を図る。また夫人は1946年（昭和21年）から10年間、福生中学校（現・福生第一中学校）で教師をしていた）
- ・忌野清志郎 - ミュージシャン
- ・大滝詠一 - シンガーソングライター、作曲家、アレンジャー、音楽プロデューサー。元はっぴいえんど。（『福生ストラット』なる曲を作っている。在住地は、隣の瑞穂町 福生市の名前をかぶせた「福生45スタジオ」というレコーディングスタジオがその自宅にある）
- ・岡野法世（陶芸家）
- ・小貫政之助（画家）
- ・栗原一郎（画家）
- ・パティ（歌手）- ヨコタ高校卒
- ・破廉ケンチ - ミュージシャン、音楽プロデューサー（RCサクセションが売れる前に在住していた事がある）
- ・三浦友和 - 俳優（破廉ケンチと同居の形で在住していた）

- ・森重樹一 - ミュージシャン、シンガーソングライター
- ・布袋寅泰 - ミュージシャン、ギタリスト（群馬から上京後、アマチュア時代に在住していた）

以上のように主にアーティストが福生に住んでいたことがあるのである。これは福生という町が日本でありながらも、アメリカを感じさせる土地であることもさることながら、1980年代の都市論ブームのなかで、福生という地に注目が集まっていたという原因があるだろう。また、福生市を題材にしている作品も多く存在する。いくつかその詳細とともに紹介すると、

- ・小説『限りなく透明に近いブルー』（村上龍） - 第75回芥川賞受賞作

米軍ハウスに暮らす登場人物たちがドラッグ・セックス・暴力・米軍人との交流で退廃的・享乐的な生活を送る様子が描かれる。村上龍自身が20代のころ実際に福生に住み体験に基づいて書かれているということで、そのリアルさと衝撃が非常に大きい作品である。

- ・小説『川のある下町の話』（川端康成）

朝鮮戦争で混沌としていた時代、したたかにアメリカ兵相手に商売をしていたこの地の情景とともに、パンパンやオンリー、また戦争特需に群がる人々の姿を描くことで、「キャバレーボーイと身寄りのない少女との恋」という純愛を効果的に際立たせている(2002年、荒居,p.124)。

- ・漫画『河よりも長くゆるやかに』（吉田秋生）

福生に住む高校生を描いた物語。主人公はよく米軍ハウスに出入りをし、黒人に女性をあっせんしてお金を稼いでいたり、ゲイバーで働いたり、姉が知り合いの米軍人と恋仲になったりと、この作品が書かれた1980年代の横田基地周辺の様子がリアルに描かれている。

また、横田基地を舞台にした作品も多く存在する。アニメや漫画に登場することが多々ある。これは、フィクションの作品を作るうえで、身近なものなから現実を超える装置として、横田基地が有効だからであろう。つまり、日本の中にあるアメリカである横田基地は日本全体でみれば異質であり、それが東京のなかにあるということがさらに現実味を忘れさせるのである。その一方で実在するというリアルさも兼ね備えているため、アニメや漫画というリアルさと虚構が織り交ざる創作物において、現実に存在するが現実味を超える装置として有効なのである。

- ・アニメ『BLOOD THE LAST VAMPIRE』ベトナム戦争中の横田基地内のアメリカンスクールが舞台。

・小説『RAID ON TOKYO』 / 『TOKYO WARS』小林源文著。在日米軍が撤収した世界で、自衛隊の反乱鎮圧の為と偽って侵攻して来たソ連軍が横田基地を確保、首都東京占領への前進拠点として使用する。終盤に自衛隊による反撃が始まり奪還作戦が行われる。

- ・漫画『ぼくらの』設定ではアメリカから奪還し、そのまま国防軍の基地になったという設定。ゲームの契約をした中学生を保護する重要拠点になっているためたびたび登場す



る。

以上のように、福生にはゆかりのある著名人・作品が多く存在する。著名人にしても福生が登場する作品にしても、そのほとんどは横田基地が存在することによる「異国性」に惹かれ、多大な影響を受けている。日本でありながらアメリカの空気を感じさせる福生は、福生に住む人々以上に、外部の人々からは創作意欲をかきたてるような特別な場所だととらえられていたのであろう。

## 2-2 横田基地概要

### (1) 概要

横田基地とはいったいどのような基地なのか。ここでは横田基地の概要について触れていく。横田基地は米空軍の基地であり、福生市・立川市・昭島市・武蔵村山市・羽村市・瑞穂の5市1町にまたがり所在する本土（沖縄県を除く）では最大の米空軍基地であるとともに、在日米軍司令部及び第5空軍司令部がおかれている極東における主要基地であり輸送中継基地としての機能を有している。筆者は横田基地についてどの程度の規模の基地であるかを、福生に暮らしながらも知る機会があまりなかった。そして、研究していくなかで横田基地が極東の重要な拠点であることをあらためて認識した。

また、現在は「再編実施のための日米ロードマップ」に基づき、航空自衛隊航空総隊司令部及び関連部隊の府中基地からの移転も行われ、平成24年3月26日には、正式に航空自衛隊横田基地の運用が始まり、共同統合運用調整所が設置されるなど、米軍の輸送中継基地から、日本の防空及びミサイル防衛の機能を持った、日米が共同で使用する基地として態様を変えている。

横田基地は、昭和15年に旧日本陸軍の多摩飛行場として設置されたことから始まり、終戦により昭和20年9月6日に米軍の進駐が行われ接收された。つまり戦後福生に突如として横田基地がおかれたのではなく、もともと基地という存在があったのである。

接收後、大規模な滑走路工事が行われ、翌昭和21年8月15日には厚木に進駐していた第3爆撃飛行大隊（A-26後にB-26）が進駐してきた。なお、この日をもって公式に基地が開設され、米軍が戦時中から使用していた米軍極東地図局が作成した地図中の「YOKOTA」から、横田飛行場（基地）と称されることとなった。（「横田」は村山町〈現在の武蔵村山市〉の当時の字名）

その後、爆撃機や戦闘機部隊が横田基地に進駐してきた。そして朝鮮戦争の勃発により主要出撃基地となった。つまり、この基地から戦争の兵器が飛び出していき、攻撃を行っていたのである。昭和35年には埼玉県入間のジョンソン基地の滑走路施設返還によって、また爆撃部隊が進駐することになった。こうして、極東戦闘部隊の最重要基地となった。福生という地から、外国に向かうための戦闘態勢ががっちりとなされていたのである。

更に昭和44年末には立川基地の飛行活動停止に伴い空輸部隊（C-130）等が移駐し、翌昭和45年には米空軍最大の輸送機C-5A（ギャラクシー）が発着を始めた。

昭和46年5月には戦闘機部隊が沖縄等に移駐したため、この時点で戦闘基地としての機能はなくなり、基地は兵站基地的性格が強くなり、さらにベトナム戦争の激化に伴って、輸送基地としての重要性を増した。

ここまでの流れをたどって見てみると、東京近郊に存在していた基地施設が徐々に横田基地に集まってきていたことが伺える。これはつまり横田基地への基地機能の集中化が図られていたとも考察できる。

こうして基地は、極東空輸中継基地へと機能を一変するとともに、関東全域の米空軍部隊の支援に当たることとなった。

昭和46年頃から在日米軍施設の整理・統合が盛んに行われており、同年に羽村学校地区と新倉倉庫地区の代替施設、昭和46年7月から昭和51年3月の間にグランドハイツ及び武蔵野住宅地区返還のための代替施設が建設されている。更に昭和48年1月に関東空軍施設整理統合計画（KPCP）、通称“関東計画”が決定し、昭和48年～昭和53年にわたり住宅275戸をはじめ在日米軍司令部、病院、倉庫等が建設されるとともに、昭和49年11月7日には、府中空軍施設から移転してきた「在日米軍司令部」及び「第5空軍司令部」がおかれ、基地はますます充実強化され、司令部機能も併せ持つ、より重要な基地となった。ただ、頭に入れておきたいのは、昭和48年に関東計画が打ち出される以前より、東京近郊の基地機能が横田基地に集まって来ていたということである。ここから、日本側が一刻も早く人口の多い東京近郊に散在する米軍関連施設を一点に集中させたかったのではないかと推測できる。

現在の横田基地は、従来の米軍の司令部機能と輸送中継機能を有する基地から、航空自衛隊航空総隊司令部と在日米軍の第5空軍司令部との併置により、日米共同統合運用調整所が設置され、日米双方の司令部組織間の連携や相互運用性（インターオペラビリティ）の向上が図られ、日本の防空及びミサイル防衛の機能も併せ持つ、日米が共同で使用する最重要施設へと態様も変化している。また、最近では大規模な編隊飛行や人員降下訓練の実施、MV-22オスプレイの横田基地への飛来など、運用もより一層活発化している（福生市企画財政部企画調整課、2016年,p.3）。このように、次第に横田基地を日米共同で使用するようになってきた流れを考えると、日本側は最終的に横田基地全体を日本のものとして返還させるところまでの思惑があるのでないかと考えられる。つまり、多摩飛行場が接収され横田基地が誕生した歴史から始まり、東京近郊にも存在していた基地機能の集中化、そしてその集中化がなされた横田基地の日米共同利用、そして現在東京都が目指す軍民共用化。この一連のプロセスこそ、日本側が巧みに基地返還を目指してきたことを裏付けるものと言えよう。そして、そういった動きがあるということを周辺住民がなんとなく理解しているからこそ、沖縄のような大規模なデモにつながらずに済んでいるのではないだろうか。

## 2-3 基地をめぐる動き

今でこそ福生では、横田基地と良好な関係を築いてきているが、福生市も含め横田基地周辺地域では、沖縄と同様、基地をめぐる動きが存在してきた。

まず昭和47年9月、東京都は基地内の都有地(水道用地)の明け渡しを求める訴訟を提起したが、昭和54年10月、基地をお取り巻く情勢を勘案して訴訟を取り下げた。そして昭和48年の関東計画に対し、東京都及び周辺の市町は、横田基地の機能強化と恒久使用をもたらすものであるとして、これに反対して国に抗議した。

昭和51年4月、横田基地周辺住民は、国に対し、米軍機の夜間飛行の禁止等を求める騒音公害訴訟を提起し、その後も断続的に提訴している。

平成3年7月、都は都市計画局長名で、横田飛行場と多摩サービス補助施設について、住民生活への影響が大きいとともに多摩のまちづくりを進めるうえで重要な空間であることを理由に、東京防衛施設局長宛て早期返還への尽力を要請した。

平成8年11月、横田基地に起因する問題の解決を図るため、東京都と横田基地周辺の立川市、昭島市、福生市、武蔵村山市、羽村市、瑞穂町の5市1町による「横田基地に関する東京都と周辺市町連絡協議会」が発足した。以来、協議会として、国及び米軍に対し、基地問題の解決に向けた総合要請や横田基地に起因する諸問題に対する個別の要請を随時行っている。

平成9年6月には、元々キャンプ・ハンセン(沖縄県)で実施されていた県道104号線越え実弾射撃訓練が北富士演習場を含む国内の演習場で分散実施されたことに伴い、米海兵隊130名が民間航空機で横田基地へ飛来した。「横田基地に関する東京都と周辺市町連絡協議会」では、海兵隊員などの輸送に際して、周辺住民に対する安全対策に万全に期すよう、同協議会として要請を行った。

平成13年から、毎年、都総合防災訓練の会場の一つとして横田基地を使用し、基地周辺自治体等からの支援物資や模擬負傷者の搬送訓練など、物資・人員の広域輸送訓練を実施している。また、平成18年以降、毎年、米軍が同訓練に参加している(東京都都市整備局基地対策部, 2016年,p.18)。

このように、福生市とその他横田基地周辺地域は、現在ではニュースなどで取り上げられるような問題は起きていないが、過去には問題を解決するための様々な動きが存在していた。

## 2-4 軍民共用化

### (1) 概要

東京都は、基地周辺住民の生活の利便性の向上や経済の活性化に資するよう、民間航空と共用して活用する「横田基地の軍民共用化」を推進している。

平成15年の日米首脳会談における、軍民共用化の実現可能性検討に関する合意を受け、

東京都は国と連携して、軍民共用化の早期実現に向けて取り組んでいる（東京都都市整備局基地対策部, 2017年, p.1）。

## (2) 軍民共用化 3つの意義

日本の航空需要は、アジア等での航空需要の増大を受け着実な伸びが予想されており、概ね 2020 年代前半には、首都圏の航空需要が現在の空港処理能力のほぼ限界に達する見込みである。横田基地の民間航空機利用は、空港容量の拡大や首都圏西部地域の航空利便性の向上など、首都圏空港機能を補完し、多摩の振興はもとより、首都圏ひいては日本経済の発展につながるものである（東京都都市整備局基地対策部, 2017年, p.2）。

1つ目の意義は「首都圏の航空容量の拡大」である。首都圏の空港容量は、羽田空港の再拡張、成田空港の滑走路延長などにより段階的拡大が行われている。しかし、近い将来には満杯になると予測され、増大する首都圏の航空需要に対応できない。横田基地の軍民共用化は空港容量を拡大させ、首都圏の航空機能の一翼を担うことができる（東京都都市整備局基地対策部, 2017年, p.3）。

2つ目の意義は「首都圏西部地域の航空利便性の向上」である。多摩地域（人口 423 万人：平成 28 年 8 月現在）及び近接する埼玉県、神奈川県、山梨県等の首都圏西部地域は、人口が多く、企業・事業所も集積している。横田基地の軍民共用化により、首都圏にバランスよく空港が配置され、首都圏西部地域で空港へのアクセス時間が短縮し、航空利便性が大幅に向上する（東京都都市整備局基地対策部, 2017年, p.3）。

3つ目の意義は「多様な航空需要への対応」である。羽田空港と成田空港だけでは、ビジネス航空などの多様な航空需要に十分にこたえられない。横田基地の軍民共用化により、このような航空需要に対応することができる。

以上が東京都の横田基地の「軍民共用化」の取り組みである。東京都の「軍民共用化」の意義には取り込まれていないが、「軍民共用化」が実現すれば、福生には今とは比較できないほどの人が訪れることが予想される。そして、経済的な発展だけでなく、文化も新たに発展していくのではないかと考えられる。そういった意味でも「軍民共用化」は福生を大きく変える町のターニングポイントになる。これについては今後の動向に注意していく。

## 2-5 基地に対する人々のイメージ

では、福生に住む人々にとって、横田基地とはいったいどんな存在なのだろうか。

福生の住民に横田基地の賛否を聞いたところ、「あってもやむを得ないが、騒音対策や生活環境整備に力を入れるべきだ」（59.1%）が約 6 割で最も高く、これと「国政上の問題であり、あってもやむを得ない」（18.9%）、「国の防衛政策上のための施設であり、あって当然である」（7.2%）の 3つを合わせた【肯定派】（85.2%）が 8 割台半ばと高くなってい

る。(福生市企画財政部秘書広報課, 2015年, p.142)

また、「福生市内の施設や行事の中で、あなたが福生市らしい魅力を感じるものはどれか」という問いでは、男女ともに約半数が横田基地を魅力として挙げているのである。これは、ほかの項目と比較しても高い割合であり、福生の魅力として挙げられたもののなかでは、三位に位置するものであった(福生市企画財政部秘書広報課, 2015年, p.69)。

なんと現在では、ここまでの割合で横田基地について肯定している人々がいるのである。このデータから読み取れるように、福生の住民にとって横田基地はネガティブな存在ではないことが伺える。むしろ、魅力として挙げられるほど、福生の住民にとって横田基地は肯定的にとらえられている。

ここから考えられることは、現在の福生に住む人々にとって、横田基地とは、自分たちの町に長らく存在してきた「親近的存在」として認識されているということだ。それは、福生がもともと多摩飛行場の存在する軍都であったことから遠因し、さまざまな訴訟等の紆余曲折を経ながらも、結局のところ横田基地の存在によって町が発展してきたと言わざるを得ないという事実、そして横田基地を一つの「資源」とする見方が福生に住む人々に刷り込まれているからである。

### 3章 福生市のアメリカンカルチャー

#### 3-1 赤線

これから、福生の文化について考察していく。横田基地の存在によって影響を受けて誕生した文化が多く存在する。どのような過程をもってして、どのような文化が生まれてきたのか。ここではまず、赤線について考えていく。

赤線とは、戦後から 1956 年の売春防止法施行まで存在した売春が認められていた区域のことを指す。代表的なのは新宿歌舞伎町のものであるが、福生にも赤線が存在した。現在でも福生では、その区域を赤線と呼んでいる。

1945 年 8 月末、連合軍が進駐してくると、日本政府は基地の近くに日本人娼婦たちを集め米国軍人の相手をさせる特殊な慰安施設(RAA)を設置した。この場所が赤線である(荒居, 2002 年,p.9)。

前述したとおり、赤線といえば都市部に存在していたものを多くの人は想像するだろう。福生の場合においては、地元民が強姦防止を理由として、米兵に配慮して赤線を建設した。この一帯に慰安施設を集めるということにより、一般市民からの隔離化、そして施設の集中化がなされていたと考えることができる。この点において、やむを得ない判断だったとしても、福生側の米軍の受け入れ姿勢が伝わってくる。施設は完成したものの、アメリカを主とした連合軍は公娼制度、すなわち公営による売春経営は認められないという表向きの理由から、開設後すぐにこれを廃止するよう命令を出したのである(荒居, 2002 年,p.10)。

その後、赤線には本格的なダンスホールができた。しかし、結局このダンスホールには、自然と全国各地から米兵相手の夜の女たちが集まって来ていた。彼女たちの多くは戦災で家や肉親を失い、横田基地へ行けば何か仕事があるということで集まってきたものが多く、その一部のものはやむを得ず米軍将兵相手となったものもいたが、当時はあまり目立っていなかった(福生市史編さん委員会, 1994 年,p.473)。

朝鮮戦争後は前述のような女性がさらに多く福生に集まってきた。そして彼女たちに提供する「置屋」と称する貸家が建てられてきた。さらには、この事業に対し、福生以外の事業家が投資し、町内のあちこちに建てられるようになってきていた(福生市史編さん委員会,1994 年,p.473)。RAA が廃止されても、ダンスホールの存在や、置屋での営業が存在していたという点は、言ってしまうと必要悪のようなものであり、一般市民から隔離化することができるという大きな利点があったため、暗黙の了解のような形で存在できていた。

では、具体的な数の方はどうだったのでしょうか。1951 年、1952 年の記録によると、娼婦の数は 700 人とされており、当時の福生の世帯数 3000 戸、人口 12,000 人だったことを考えると、かなりの数の娼婦がいたととらえることができる(荒居, 2002 年,p.10)。このデータでは赤線にだけ置屋が集中していない時期も含まれているが、それを踏まえても、赤線にこれだけの数の娼婦が集まっていたと考えると、かなり売春の集中化というものがなされていたことが伺える。

青少年育成の観点からすれば、こうした売春地域はまことに好ましくないということから、サンフランシスコ講和条約発効(1952年4月)後の同年5月に福生地区警察は、東京都警察隊長と町長、学校長、PTA会長を一堂に集めて会議を行った。その席上、今の赤線と呼ばれる一帯に置屋を集め、この地域以外での営業を徹底的に取り締まることに決めた。赤線の誕生である(荒居, 2002年,p.11)。この時点で、完全に売春の一般市民からの隔離化、赤線への売春の集中化がなされた。

その後すぐ、1952年9月福生町長による、街娼婦の問題についての協議会が開かれた。ここでは、街娼婦による青少年への影響、そして米軍兵士の風紀の乱れた行為などが問題にあげられた。この議会のなかで、福生は街娼婦によって経済的に発展してきたことが認められている。しかし、それは正常な発展ではなく、異常な発展であるとされた。そのため、この議会では風紀取締りに関する決議がなされた。そして、1953年11月から風紀取締条例が施行されることになった(福生市編さん委員会, 1993年,p.110-116)。

こうして、赤線区域内では業者は事実上の営業不能となった。しかし、赤線区域そのものは衰退するわけではなかった。白人以外立ち入り禁止である、通称“オフリミット”の時代が終わり、朝鮮戦争後あたりから、黒人も赤線街に立ち入ることができるようになった。そこから、ベトナム戦争を経て、黒人が客筋となるディスコが隆盛を極めていった。これは、福生に限った話ではなく、映画「サタデーナイトフィーバー」の影響も相まって、日本全体のムーヴメントとして、ディスコが流行していた時代である。そして福生の中では黒人の間で男性のことをブラザー、女性のことをシスターと店の中で呼ぶディスコブームが起きていたのだ(荒居, 2002年,p.14)。

ディスコに通う若者たちは黒人にあこがれ、そのファッションをまねた。そこまではディスコさえあれば言ってしまうだけでもできた。そして若者たちは「本物」と接触することにステイタスを感じるようになる。これはどこのディスコでもできたものではない。そこで、「基地の町」という存在が重要視された。福生のディスコに来れば、「本物」の黒人に出会えたわけである。この時福生のディスコは六本木や新宿のディスコにはない、「真正性」を持つディスコとして捉えられていた。ここで横田基地から福生のディスコを訪れる「黒人」と接触することは、六本木や新宿にはない、サブカルチャー的「真正性」を保証するものとなっていた(難波, 2014年,p158)。

こうして、「基地の町」福生に対するサブカルチャー的イメージが持たれるようになっていった。このような認識が生じることになった背景には、音楽やファッションなどのアメリカのサブカルチャーに対する憧れは強いものの、現地に直接アクセスすることは難しいという、当時の日本に特有な文化的「片思い」の状況が存在していた。この状況下で、間接的であるとしても、福生は擬似的な「本場」としてとらえられたため、「基地の町」福生のサブカルチャー的イメージが持たれるようになっていったのだ。こうして単なる売春地域としての機能だけではなく、サブカルチャー的要素を持つ繁華街としての機能を持ち始めていったのである。

バブル期には、開発途上であった多摩西部は工場や住宅、マンションなどの開発ラッシュとなった。建設会社を中心に接待でカネを使い、当時の赤線街はあふれんばかりの日本人が押し寄せた。そういった状況下で赤線の店側は料金をどんどん吊り上げていった。さらに円高も追い打ちをかけ、かつての白人や黒人は姿を消していったのである(荒居, 2002年,p.14)。こうして、一般市民からの隔離化のための赤線が、次第に一般市民も利用する繁華街へと変容を遂げていったのであった。これは、売春を集中させ、一般市民から隔離化する必要があった時代の終了を意味する。その意味で赤線はその存在目的を達成することができたのである。

バブル期が終わり、赤線にも不況の風は吹いた。しかし、そんななかでも、アンダーグラウンドの雰囲気漂う一帯として、会社員や学生、フリーターなどさまざまなタイプの利用者が存在していた。これは、赤線というものがどこかでかつて外国人が多く集い、ほかの地域にはない、サブカルチャー的オーラをまとっていたからこそ、利用者がいたのである。

そうして現代にいたる。現在ではすっかりさびれたような外観の店も、一つ一つが前述したような歴史を経験してきた店なのだ。米軍人の影響を直接受けてきた後は日本人の利用があった。現在も赤線が残っているのは、人々がかつて売春地域であったアンダーグラウンドでサブカルチャー的赤線のオーラに惹かれていることはもちろん、それ以上に赤線の商店街が環境の変化に負けず柔軟に対応してきたからである。こうして、今では異国情緒の漂う文化の一つとして赤線は存在している。

### 3-2 米軍ハウス

次にアメリカンな空気を存分に感じることができるのが、米軍ハウスの存在である。米軍ハウスとは、基本的には「米軍基地の敷地外にある民間経営の賃貸物件でアメリカ人向けの一軒家」を指す。東京都の横田基地近くの福生市・瑞穂町・昭島市周辺にあるものと、旧立川基地（現在は返還され、その一部は昭和記念公園となった）に存在したアメリカンビレッジ、またジョンソン基地周辺にあった集落等が有名である。また文献等によっては、基地内のハウジングエリアに建てられた一戸建て住宅を対象に含める場合もあり、その場合は調布飛行場西側（住所としては府中市）の通称「関東村」と呼ばれたエリア（現在の警察大）なども含まれる。

そもそもなぜ米軍ハウスは建設されたのか。理由としては、本国に妻子がいる兵隊が日本人女性を愛人にするケースが増え、軍がその予防対策で本国から妻子を呼び寄せ、家族と一緒に住ませる目的で、基地の外に一戸建ての建設を日本人に奨励したので(荒居, 2002年,p.90)。つまり、その名の通り、横田基地に住む米国人向けの住宅だったのである。

建設のために全国各地から労働者が集まった。ひとつの建物を一、二か月でつくってしまうという、かなりの急ピッチで工事が行われたようだ。さらには、軍の厳しい条件付きのチェックで建物を仕上げるため建設技術が向上し、福生の産業活性化に大きな役割を果



たした。ハウス建設で大儲けし、それを元手にその後、事業を拡大したものも多かった(荒居, 2002年,p.90)。

この、横田基地の軍人のために作られた住居に日本人は、アメリカ的な生活様式、アメリカン・ウェイ・オブ・ライフを感じていた。米軍基地の存在によって日本人はアメリカのライフスタイルの圧倒的な豊かさに直面し、アメリカン・ウェイ・オブ・ライフへの憧れを強めていったのである(吉見, 2007年,p.162)。そして米軍ハウスは、そのアメリカン・ウェイ・オブ・ライフを体現するものの一つであった。

住居だけではなく、家具もそれに合わせて作られた。当然米軍ハウスのための家具であるため、日本的な家具ではなく、アメリカ的な家具が作られていたのである。住居も家具も、当時のアメリカ人にとっては中流以下の大衆的な好みに適するものだったが、日本人にとっては革新的で憧れの対象であった(吉見, 2007年,p.166)。

米軍ハウスは主に、基地に隣接する国道 16 号線と JR 八高線の間集中した。なぜこの一帯に短期間で米軍ハウスを建設することができたのか。それは、横田基地司令官自ら、当時売春しか経済的原動力がなかった福生に「建設」による新しい経済的原動力を農家に促したからであった。司令官によれば、基地にハウスが不足しているため、置屋だった建物をハウスに転用してほしいとのことだった。住宅供給が安定すれば、ハウスに住む米軍家族も福生の町に繰り出し買い物をするようになり、福生の町の発展に貢献するだろうということだった。その結果、町内の多くの農家がハウス建設に乗り出すことになり、外部資本が加わり急速に建設が進んだ。建設ラッシュになれば町の大工だけでは足りず、大勢の作業員が市外からも多く押し寄せた。それに伴い飲食店も次々とでき、経済的な活気が生まれた。また、米兵たちが住むとなるとハウスにはメイドも必要であり、市内の多くの女性が雇われた(荒居, 2002年,p.91)。この米軍ハウスの建設は単に「建設」という経済的原動力をもたらすだけでなく、アメリカの様式の建築のノウハウを獲得していったことで、その後の日本の建築に家具も含めて影響を与え、この様式と同様の住宅や家具が増えていくこととなった。この動きは福生だけにとどまるものでなく、全国規模のものであった。こうして、アメリカン・ウェイ・オブ・ライフは次第に日本人に浸透していった。ただほかの地域と福生が違う点は、基地が存在するという直接性にある。基地の存在によって、よりアメリカン・ウェイ・オブ・ライフに直面することになり、米軍ハウスへの憧れも強かったのではないかと考えられる。

1970年(昭和45年)頃から米兵が基地内のハウジングエリアに移りはじめるとともに、日本人青年が好んで住むようになり、そこから多くの有名ミュージシャンや小説家、画家等を輩出するという現象が起き、これらのエピソードは俗に『福生幻想』と呼ばれることがある(荒居, 2002年,p.166)。ただ現在は老朽化のため取り壊されたり、建物が現存する場合でもリフォーム等により内装が一新されていることが多く、建設当時の姿をとどめている建物は数少ない。

また、米軍基地が存在する沖縄にも、これと似た建物が多数存在するが、これらは地元

民によって、単に『外人住宅』と呼ばれ、米軍ハウスと呼ばれることはほとんど無い。ちなみに、本来の住人であるアメリカ人からは《off base house》《dependent house》などと呼ばれる。

米軍ハウスには現在も人が住んでいる。米軍ハウスに住むことで日本に住んでいながら、擬似的アメリカン・ウェイ・オブ・ライフを体験することができるのである。

また、米軍ハウスはたびたび小説などの作品に登場する。村上龍の『限りなく透明に近いブルー』においては、米軍ハウスにおける享樂的で退廢的な生活が描かれている。吉田秋生の『河よりも長くゆるやかに』では、米兵がパーティーを開いている場面が描かれている。

村上龍の『限りなく透明に近いブルー』に関しては、1976年9月の市議会的一般質問において話題にも出された。質問の内容としてはこうである。福生の米軍ハウスが舞台となっている作品である『限りなく透明に近いブルー』において、麻薬、ロック、乱交、幻覺と陶酔の中のショッキングな青春が凄烈に描かれている。そのため青少年に悪影響を与える可能性が非常に高いものであると同時に、福生のイメージダウンにつながるものであるとされ、どこから来たかわからない若者たちによって『限りなく透明に近いブルー』が再現されてしまうのではないかという懸念のもと、対処を伺いたいというものだった。市長の答弁としては、ハウス問題が悩みの種であることは認めつつ、市の方でどうにかできるものではないとして、家主やハウスの組合に協力してもらおうほかないとの回答だった(荒居, 2002年,p.114)。

米軍ハウスの存在以上に、一つの作品によってここまで、問題となっている点は非常に興味深い。また時には、新聞の朝刊で福生の米軍ハウスが犯罪者のアジト化しているということで『悪の温床外人ハウス』という仰々しい見出しで報道されてしまったこともあった。当然ハウス住民は激怒し、『福生ハウス住民連合』を結成し、この報道に抗議をし、結果和解した(荒居, 2002年,p.115)。

このように、米軍ハウスは、作品の舞台になることもあれば、議論のやり玉に挙げられることもある、特殊な経験をしてきた文化であると言える。作品で描かれる際には、パーティーを行っていたり、ドラッグを使用するシーンであったり、非日本性を強調するかの如く描かれることが多かった。これはどういうことか。作品で描かれる米軍ハウスでの退廢的・享樂的生活は、一般世間から隔離された様相を呈している。言ってしまうとアナーキーである。つまり米軍ハウスの中の暮らしは日本ではなく、そこにはアナーキーなアメリカ的生活が広がっているのである。アメリカン・ウェイ・オブ・ライフとはまた別のアメリカの擬似的「本場」として米軍ハウスが機能するのだ。そうして、アメリカ的であると言えるパーティーやドラッグが登場してくるのである。

一方で、現在では米軍ハウスでの自由に洒落た生活が紹介された本が出版されている。もともと置屋だったものが転用されたものもあり、そしてそこに米兵の家族が暮らし、のちに日本人が暮らすようになり、さまざまな作品で描かれ、現在ではおしゃれなものとし

て捉えられている。このおしゃれなものとして捉えられていることは、米軍ハウスが福生に建てられはじめ、その生活に日本人が憧れていたという様相と同様である。米軍ハウスは、アメリカン・ウェイ・オブ・ライフを実際に体験することができる、アメリカの擬似的「本場」を体験することができる場として、非常に重要な文化である。

### 3-3 商店街

福生市には、「ベースサイドストリート」あるいは「ルート16」と呼ばれ、国道16号線に沿ったアメリカンなお店が立ち並ぶ商店街が存在する。「ベースサイドストリート」や「ルート16」は最近メディアなどで呼ばれるようになった呼称であり、時代によって呼び方が違っていたりする。ここが現在いわゆる「基地のある町 福生」の象徴となるような一帯となっている。最近福生を知った外部の人は福生と言えればまずこの一帯を思い描くだろう。

この「ベースサイドストリート」一帯は2つの商店街で形成されており、横田商栄会及び、福生武蔵野商店街振興組合によって成り立っている。横田基地の反対側に位置する片側だけの直線型商店街である。街区は、横田商栄会は福生市北端のやや南の地点から横田基地第2ゲート(FUSSA GATE)までの約600m、福生武蔵野商店街振興組合は、横田商栄会に続いて同第5ゲート(SUPPLY GATE)までの約1000mとなっており、総延長1,600mに及んでいる(東京都商工指導所商業部, 1997年,p.13)。

横田商栄会及び福生武蔵野商店街振興組合の成り立ちとしては、第二次世界大戦後、当時の旧日本陸軍飛行場が接收され横田基地となった。基地には当然米兵ら住民が住むことになり、基地内外の住民は商品やサービスが必要となった。そこで、全国からさまざまな業種が自然発生的に集まり、商店街を形成し始めたというのが、両商店街の始まりとされている。横田基地は米軍において極東の重要な軍事拠点となっており、基地対象の商店街であった両商店街は、朝鮮戦争、ベトナム戦争時にはかなりの盛況を見せた(東京都商工指導所商業部, 1997年,p.14)。つまり、この時の両商店街は完全に「基地のためのもの」であった。

しかし、その後のアメリカ経済の弱体化や極東における戦略の変更で、駐留軍人が削減されるとともに、基地関係の需要が低下していった。また、日本の経済成長により円高ドル安が拍車をかけ基地需要は壊滅的といえる状況になってしまっていた。このため、商店街は基地への依存から日本人を対象とする経営に転換を進めてきた(東京都商工指導所商業部, 1997年,p.14)。ここで、「基地のためのもの」であった両商店街は日本人のための店へと変容を遂げていった。

以上が基地周辺の商店街を形成する二つの商店街の概要である。この商店街そのものも文化として捉えることができるが、お店一つ一つも個性豊かで文化を形成していた。ここでは、二つほど紹介する。

一つ目は、つい二年ほど前に店を閉めたテラー「K・ブラザーズ」である。この店は 55

年もの歴史のあるテラーだった。1960年代アイビーリーグの学生が流行らせた「アイビー」というファッションがあった。さらにその社会人版が「トラディショナル」。そしてその中間に位置した遊び人風の風俗、それが「ファンキー」だった。白人から差別を受けていた黒人兵にとって、自分の服をオーダーすることは精一杯の自己主張であり、ステータスだった(荒居, 2002年,p.50)。

彼らは服をつくっては、「ファンキー」ファッションを身にまとして六本木や新宿の盛り場へ繰り出した。このファンキー・スタイルを基調とした風俗が日本人の間でも広まり、いわゆる遊び人の間で流行した。同時期、1960年代後半から爆発的なソウル・ブームがはじまり、23区内はもちろん、千葉、埼玉、神奈川、群馬あたりから福生にやってくる服を仕立てるのがブームとなった。牛浜駅前にあった黒人ディスコでは、新しいもの好きの若者たちが慣れない英語を話しながら黒人たちと交流していた(荒居, 2002年,p.51)。このテラー「K・ブラザーズ」こそ、3-1の赤線のところでも触れたアメリカの擬似的「本場」であると言える。黒人がここで服を作り、そしてその黒人のスタイルにあこがれた日本人の若者たちもまた訪れ、黒人をまねた当時の最先端のファッションを身にまっていたのである。

こうして次第に軍人から日本人へとその利用者を変えていったテラー「K・ブラザーズ」は「基地のためのもの」から日本人向けの店と変容を遂げていった商店街の代表的な店である。

もう一つが際コーポレーションである。際コーポレーションは、1990年に創業され、福生に一店舗店を構えてからはじまり、現在では国内外383店舗展開し、グループ全体317億円の売上を出すほど成長している会社である。ただ前提として考えていきたいのは、この際コーポレーションは「基地のための店」の時代が終わり、日本人向けの店として最初から福生に店を構えてきたということだ。福生だけでも17店舗も出店している。筆者も福生にある際コーポレーションの飲食店「デモデヘブン」「デモデダイナー」「ズコット」「蕪菜饅頭」を訪れたことがあるが、同じ系列のお店とは思えないほど、どれも個性的なお店であった。内装がとにかく凝っているのである。また、料理もお店ごとに全く違ったテイストで提供しているこだわりようである。

際コーポレーションの中島社長が初めて福生に出店してきたときは、基地周辺にはファサード(店舗の前面=フロント部分)やインテリア、レイアウトに個性のある店は少なかった。そんな中で中島社長は新しい発想と視点で店を増やしていった。従業員の手書きによる店の外壁、中古材を生かした手づくりの内装、餃子に対する新しい工夫、ご飯ものに対する独自の味付けなど、さまざまな趣向を凝らし、若者好みの店を展開することで新風を巻き起こし、いまや熱風を送る(荒居, 2002年,p.59)。

そもそもこの際コーポレーションのような店がそれまで横田基地周辺になかったのはなぜか。それは「基地のための店」が日本人向けに変容していくなかで、どの店もあくまで「基地のための店」の延長であり、そのスタイルはアメリカンな様相を放ちながらも、新

たに若者向けにするなどといった試みは行われてこなかったからである。そこで、もともと店を構えていた商店街の人々以上に、中島社長は横田基地を一つの「商品」とみなし、押し出していったのである。

中島社長のモットーは「店が変われば街も変わる。そこに新しい生活が誕生する」である。筆者が基地周辺を意識するようになったときにはすでに際コーポレーションの店が多く存在していた。むしろ、基地周辺の店を想起するとき、真っ先に思い浮かぶのは際コーポレーションの店である。また最近では、福生の基地沿いの店を紹介する雑誌やネットの記事でも、際コーポレーションの店が何店舗も紹介されていたり、アイドルやタレントの写真撮影のロケ地として使われていたりする。

このことを踏まえて考えると、基地周辺に点在する際コーポレーションの店は“基地周辺の異国情緒漂う店”として広く福生内外の人間から認識されていることが伺える。これはまさに中島社長の言うところの「店が変われば街も変わる」ということであり、際コーポレーションの特徴的な異国情緒を漂わせる雰囲気は街そのもののイメージの変容にもつながっているととらえることができる。つまり、「商品」としてのアメリカの扱いに成功しているのである。言ってしまうえば、もともとあったアメリカ的なものたちの土台の上に、よりわかりやすい表層的なアメリカ文化を生み出したのが際コーポレーションなのである。

### 3-4 音楽

福生は米軍基地の影響で、音楽に関しても独特な文化を築いていった。特に福生の音楽を考えていく上でははずせないのが、大滝詠一が存在であろう。

大滝は元はっぴいえんどのメンバーで知られる。このバンドはロックを初めて日本語の歌詞に乗せて歌ったバンドと言われており、細野晴臣、松本隆、鈴木茂がメンバーだった(荒居, 2002年, p.138)。

はっぴいえんど解散後の1975年、大滝詠一はメジャーのレーベルとは別に音楽仲間たちと独自のレコード制作会社ナイアガラを立ち上げ、ソロで活動を開始した。DJやCM音楽でもその才能を発揮し、音楽の世界で異能の人と呼ぶにふさわしい日本の音楽界の重要人物である(荒居, 2002年, p.138)。

大滝詠一と福生との関係は、大滝の日本のポピュラー音楽についての洞察と関係している。大滝は日本のポピュラー音楽の歴史的宿命について、「分母分子論」として展開している。ここで分母とは世界史、分子とは日本史のことである。近代に入ってから日本の音楽はすべて輸入であり、その意味で、「世界史分の日本史」と表することができる。大滝によれば、ニューミュージック以前のミュージシャンは、分母に世界史があり、その上に自分たちの音楽があることを意識していた。だがニューミュージック以後に登場したミュージシャンは、世界的な音楽の潮流ではなく、それを踏まえた日本の音楽を分母にしている。つまり世界史が意識されていない。ここにいたって、「世界史分の日本史」を分母にする日本史という三層構造が生まれる。さらには歴史の蓄積や継起という概念さえも崩れて、さまざま

なジャンルを随意取り込むスタイルも生まれてくる(難波, 2014年,p.68)。

このような歴史観に基づき、大滝は自分の音楽活動を「分母の確認」と定義する。言い換えれば、大滝にとって音楽とは、意識の外に埋もれてしまった世界史的な地盤をもう一度発掘し、確認する作業である(難波, 2014年,p.68)。

その作業はほとんどパロディと変わらなくなる。なぜなら、楽曲を作るには、イディオムをただ集めるだけでなく、そこに解釈を加え、組み合わせるという要素が必ず入り込むからである。つまり、「分母の確認」は必然的に一種の批評行為になる(難波, 2014年,p.69)。

この大滝の音楽的スタンスから、福生との関係を考えることができる。大滝は福生ではなく、岩手県出身である。それでも福生に移り住んだのは、福生という基地のある郊外は、日本の中で、ポピュラー音楽の世界史的な地盤がまだ顔をのぞかせている場所であり、それゆえ確認という名の音楽生産の拠点となるにふさわしい場所であったからである(難波, 2014年,p.69)。つまり、ここでも言えることが、大滝詠一も福生にアメリカ的カルチャー、もっと言えば世界的カルチャーの「擬似的」なものを感じていたのである。

ここで確認しておきたいのが、世界史的な地盤の確認というものは、土着的なものを軽視するものではないということだ。むしろ、土着的なものを再構築するための行為である。大滝にとって、音楽の批評とポピュラリティは両立するのである(難波, 2014年,p.70)。

福生を代表する著名人である大滝詠一。大滝は福生の基地周辺に世界史的なものを見た。そして福生から音楽を発信していった。福生と音楽を考えるうえで欠かせない存在である。福生が大滝の求める「擬似的」な「世界」を感じさせていたのだ。大滝詠一という一人の人物が福生の外からやってきて、福生の空気に触れながら創作活動にいそしんだ。言ってしまうとそれだけの話である。ただ、福生という地に外部からやってきて、そこに世界史的な地盤を感じ、そこから生み出されていった音楽が存在していたということは、それだけ、横田基地のある福生という街が特殊な空気感を放っており、強烈なまでにアメリカの擬似的な「本場」であったということを顕著に表している。

もう一つ福生の音楽カルチャーには「UZU」と呼ばれる有名なライブハウスがある。UZUはベトナム戦争後半に福生に作られた。当時はロックをライブで聞かせる店は渋谷の「屋根裏」しかなかった。米軍ハウスにミュージシャンや画家、彫刻家や俳優などを目指す若者が多く住んでいた時代。UZUを改装するときはそんなアーティストの手を借りた。ベトナム戦争後は、米兵たちが店を訪れ、自分たちの軍服を脱ぎ、「自分たちは自由だ」と叫び、ドロドロになるまで踏ませ、前の空き地にある木に軍服を着せ、ガソリンをかけて燃やしたということもあった(「UZU HP」<http://uzu69.com/history/>)。

それから五年後くらいに THE STREET SLIDERS との出会いがあり、彼らは UZU に三年間通ったのちに、ソニーからデビューした。そして、ZIGGY や JUN SKY WALKER(S) をはじめ、UZU のステージを経て、続々とデビューしていった(「UZU HP」<http://uzu69.com/history/>)。

UZU は現在でもやっており、さまざまなバンドが演奏している。基地周辺であることの

直接的な影響はそこまでないものの、十分に基地の町が生んだ文化だととらえることができる。

1960年代末期には、「魔神岩」というロックバンドが基地内 NCO クラブでコンサートを行い、大成功を収めた。これをバックアップしたのが、UZU の経営者夫婦の夫の稲用とらおさんだった。この成功が稲用さんの自信となり、福生の河川敷の公園で行う「カニ坂フェスティバル」の開催のきっかけとなった(荒居, 2002年,p.142)。基地内のクラブでコンサートを成功させることで「本場」での成功を擬似的に体験し、それがまた擬似的「本場」を体験することができる場を生み出すことにつながったのである。

前述した、「カニ坂フェスティバル」も福生の音楽を考えるうえで重要である。「カニ坂フェスティバル」は毎年夏に行われる、ロックを中心としたコンサートとイベントのフェスティバルである(荒居, 2002年,p.144)。

筆者もカニ坂公園に訪れたことがある。公園といっても、遊具などがあるわけではなく、ただ芝生があり、ひたすら緑に囲まれた公園である。基本的にはウォーキングやジョギングで通過するだけの通り道のような存在だ。

前述したとおり、「カニ坂フェスティバル」はライブハウス UZU の経営者、稲用さんが約 30 年前に始めた。福生市立体育館を貸し切り、市内で初めてのロック・コンサートを開いた。1970 年のこのコンサートをきっかけにして、稲用さんがプロデュースして、富士山の麓で数万人を集め、自然回帰のコンサートを開いた。今をときめく喜多郎も、ここでデビューした。この富士山コンサートは四年間続き、高校生を参加者にして「信じあうまで汗かこうコンサート」を開き、これが現在のカニ・フェスに引き継がれていった(荒居, 2002年,p.144)。

フェスの運営費はカンパでまかなう。実行委員会を作り、自営業、サラリーマン、OL、フリーター、福祉施設職員とさまざまな職業の人たちが、夏の一日のイベントを陰で支える。福生のバンドが出演するコンサートのほかに、散髪 1000 円の青空床屋があったり、エスニック料理があったりとそれぞれの楽しみ方ができる(荒居, 2002年,p.145)。

20 年前、反核を全面に打ち出した「ノー・ニューク・コンサート」の時には、全国からヒッピー系やら政治団体系やらが福生に来て、大騒ぎになった。その様相はまるでウッドストック(ベトナム戦争や人種差別反対などの反体制運動を背景に、1969年8月に三日間にわたって開催され、約 40 万人の観衆を集めた伝説のロック・コンサート)の日本版であった。この時期は当局がマリファナをやっているのではと、目を光らせていた時期でもあった(荒居, 2002年,p.145)。それほどまでにアメリカ的であったのだ。この「ノー・ニューク・コンサート」は特にアメリカの擬似的な「本場」を現出させていた。

「カニ坂フェスティバル」は現在でも続いている。筆者は足を運んだことはないのだが、テレビで特集されているのを見たことがある。そこでは、若者こそ少ないものの、ロックを愛する不良なおやじたちが歌い、訪れた人々を魅了していた。訪れた人々の中には音楽に合わせ、自由に踊りくるう人々もいた。「カニ坂フェスティバル」には規模こそあまり大

きくないが、現在でも「本場」を体験できる場として、人々を根強く惹きつける魅力があることは間違いない。

以上、紹介した三つだけでも、福生には基地の町特有の音楽のカルチャーがあることが感じとれるだろう。この福生の音楽カルチャーは顕著なまでに、アメリカの擬似的な「本場」を感じさせる。そしてそこには、音楽を愛する人々の情熱と、基地文化特有の自由な風が吹いていた。

### 3-5 文化のまとめとその他

上記以外にも、横田基地の存在によって生み出されてきた文化がある。まず興味深いものが、「フリーク・ネーム」というものである。

福生には本名以外の名前で普通の生活のなかでやりとりをしている人たちがいる。これを『ゴーゴー福生』の著者、荒居さんはフリーク・ネームと呼んでいる。フリーク・ネームの由来は、1960年代のヒッピー運動やコミューン運動に遡る。自分の名前と異なる名前を仲間や所属の団体間で使うものである。本来閉鎖的なグループで使われるものだが、福生ではごく普通の日常生活のなかで使われていたりするのである(荒居, 2002年, p.156)。これは、福生がアメリカの擬似的「本場」であることの表出である。

また、2011年には福生のグルメとして「福生ドッグ」というものが誕生した。これは、福生にあるハム工場で作られたソーセージと、オリジナルのパンズで作られるホットドッグである。福生にあるさまざまな店が各店オリジナルの福生ドッグを販売している。福生ドッグのホームページ(<http://fussadog.jp/faq/>)を見るとわかる通り、横田基地のある町として福生を紹介しており、サイトのレイアウトもどこかアメリカンな雰囲気を漂わせており、横田基地の影響を多大に受けた、比較的最近誕生した文化である。これは、福生という街がアメリカの擬似的「本場」であることを福生側も理解し、さらには強みとして打ち出そうとして誕生したものである。ホットドッグというわかりやすいくらいにアメリカンなフードをご当地グルメに据えることで、福生はアメリカの擬似的「本場」であることを強調するのである。

以上、福生における横田基地に影響を受けた文化を数多く紹介してきた。文化について考察していくなかで、福生の文化には二つの段階が存在することがわかった。

一つ目の段階は戦後横田基地という存在を受け入れざるを得ない状況の中で誕生した文化である。赤線や米軍ハウス、基地周辺の商店街などは、この一つ目の段階の文化である。

二つ目の段階は、横田基地という存在を背景に、米軍基地という存在を商品化することで誕生した文化である。これは、戦後徐々に醸成されていった文化とは違い、比較的最近生み出された文化である。際コーポレーションが福生の町にもたらした新たな文化誕生の風は、まさに米軍基地という存在を商品化したうえでのものであると言える。

この観点からいうと、音楽はどちらにも当てはまらずに独自に続いてきている文化であると言える。しかし、いずれの文化にもあてはまることは、福生がアメリカの擬似的「本



場」であるということだ。

このように、福生には一見バラバラな文化が存在してきた。しかし根底では、戦後から数十年たったアメリカ文化を受容するブームのなかで、アメリカの擬似的「本場」として特に福生の外部の人々はその魅力に惹かれ、足を運び、そうして文化が醸成されていった。

## 4章 沖縄の米軍基地

### 4-1 基地文化

ここまで、福生の基地周辺の文化について述べてきた。ここからは、沖縄における基地文化について考えていきたい。

1950年代半ばまでは日本本土の基地周辺と、沖縄、韓国、台湾、フィリピンなど冷戦初期から米軍が展開した各地の基地周辺は連続的だった。沖縄の場合、アジア最大の米軍拠点である嘉手納基地に面したコザにおいて、基地と大衆音楽との結合が、長きにわたって生じてきた。60年代以降、日本本土の米軍基地が全体として縮小の方向に向かったのとは反対に、米軍のアジア戦略全体を支える「太平洋の要石」沖縄では、軍用地はさらに拡大されていった。基地の街の日常は、米軍に対する慰安やサービスの供給なしには成り立ち得ないものであった。コザは戦火に焼き尽くされて荒廃した沖縄本土のなかで、もともと基地に隣接する難民収容地区として出発した。やがてこの街は、ビジネスセンター八重山特飲街などの建設を通じ、米軍のための慰安やサービスの提供に依存して発展していくことになる(吉見, 2007年,p.123)。

たとえば八重山特飲街は、朝鮮戦争の特需のなかでホステス 300 人、人口一千余人にまで膨れ上がり、さらに周辺に「ワイキキ通り」「センター通り 19 班」といった新しい売春街区を誕生させていった。さらに 60年代半ば以降、ベトナム戦争の拡大に伴って嘉手納基地の兵力は増強され、その前に広がるコザの街は殺気立った活況を呈していく。「米兵の札束をいかにして使わせるかでどの A サインバーも必死になるため、先を争うように米兵に酒を勧め、売春をし、フロアショーを行い、ロックバンドを採用」していった(吉見, 2007年,p.123)。

このブームに乗り、それまで「公民館でエレキ大会を開いて楽しむ程度であった素人バンドまでを含めて多くのロックバンドがにわかには脚光を浴び」、やがて 70年代には、紫、コンディション・グリーンといったグループが華々しい活躍をしていく。しかしこの基層には基地から流れ出るドルを目指して北は奄美や宮古から、南はフィリピンに及ぶ地域から雑多な人々が集まるコザという街があった。とりわけフィリピン・バンドが沖縄ロックの形成に果たした役割は大きく、クラブ専属の彼らを真似ながらロック・シンガーへの道を歩んだ者も少なくなかった。平井玄は、当時、沖縄のロッカーたちに「ヤマトのグループがほとんど意識されていなかった」と語る。彼らが相手にしていたのは何よりも基地の米兵たちであったから、その音楽は、日本本土の音楽状況とはほとんど別次元、むしろアメリカ本土との関係で変化していった(吉見, 2007年,p.123)。

このように、沖縄の文化について考えると、米軍のための商業施設の発展、売春、ロックバンドなど、横田基地の文化と非常に似ていることがわかる。こと音楽に関して言えば、

大滝詠一が福生にポピュラー音楽の世界史的な地盤を見出し、音楽活動に励んでいた点と、沖縄のロッカーたちが日本本土の音楽をほとんど意識せず、アメリカ本土との関係で変化していった点は非常に近いものを感じる。

しかし決定的に福生と沖縄では違う点がある。それは、沖縄はよりアメリカ的であり、そこにはアメリカのサブカルチャー的な真正性以上に、アメリカそのものの真正性が存在した。これに対し、福生が内包していたのはアメリカのサブカルチャー的真正性であった。この違いはなぜ生じたのか。それは沖縄と福生の場所の違いが大きく関係している。沖縄は、本土とは離れた地で基地が密集しているという点で、一種のリトルアメリカが形成されていったととらえることができる。これこそが沖縄がアメリカそのものの真正性を持つ理由である。これに対し、あくまで東京のなかで、米軍基地という異質な存在が集中していたのが福生であった。東京という大都市のなかにたたくアメリカ。あくまで福生は基地のためのリトルアメリカではなく、日本のなかで基地の人々のための店も存在するという部分的アメリカ性を持った町であった。そして、日本、とりわけ東京という都市の中で、アメリカンカルチャーブームに直面した若者たちが、横田基地の存在する福生に「本場」を感じ、足を運ぶようになったのである。しかしこれは東京近郊の中でのみ意味を成すということであり、福生のアメリカ文化とはあくまでローカライズされた資源であるのだ(難波, 2014年, p.158)。こうしてローカライズされた資源でありながらも、東京近郊の若者の「本場」への憧れに応えるかたちで、福生がアメリカのサブカルチャー的真正性を持つようになった理由である。

#### 4-2 沖縄の基地問題と横田基地の比較

ここでは、本論文の研究動機でもある、沖縄の基地問題はニュースでたびたび報道されるのに対し、横田基地に関しての報道はなかなか目にしないのかを比較検討していく。

今でこそあまり問題にされていないが、1章の横田基地の概要でも述べたように、横田基地周辺の地域は訴訟など起こして基地に対してたたかっていた歴史がある。とくに横田基地周辺の基地問題として有名であるのが、砂川闘争である。この闘争は、福生ではなく、立川で起きた闘争である。

砂川闘争とは、1955年、米軍立川基地の拡張計画が明らかになり、当時の砂川町(現立川市北部)の農家ら住民が反対同盟を結成。労組員らも運動を支援した。拡張予定地の測量をめぐる警官隊とたびたび衝突し、56年10月には1千人を超す負傷者が出た。予定地の地権者のうち23人が最後まで買収を拒否。米軍は68年に、国も閣議で69年にそれぞれ計画中止を決めた。立川基地は77年に全面返還された(朝日新聞2012-01-31朝刊 都区内 2地方)。

この砂川闘争については現在でもニュースの記事で取り上げられることがある。それだ

け基地問題を考えるうえで重要な出来事であったことが伺える。なぜなら、基地の拡張計画に対し、住民たち自ら反対し、警察とも衝突しながらも、計画中止まで持ち込んだからである。

当然、沖縄でも同様な強引な土地の接收問題があった。

1952年4月28日は、沖縄では「屈辱の日」と称される。サンフランシスコ平和条約の発効で日本は独立国として主権を回復、しかし沖縄は日本本土から分離され、アメリカの施政権下におかれた。米国民政府は、沖縄戦以後、接收し基地として使用していた土地に関して、布告・布令を発し使用権限を固めていく。

嘉手納基地・普天間基地など、主要な米軍基地はすでに沖縄戦の時点から建設、整備されていった。捕虜となった住民が米軍に収容されている間に、田畑や集落が敷きならされ、基地となっていったのである。旧日本軍の飛行場だったところもあるが、多くは住民の生活の場が基地として次々と占領されていったのである。米国民政府は1953年4月、合法的に土地を収用するための布令を発する。布令一〇九号「土地収用令」。住民が「土地収奪法」と呼んだこの布令は次のようなものだった。

〈土地取得に関し、所有者との協議で意見の一致をみることができないときは、民政府副長官は米国の名において次のように処理せしめる〉

〈(土地所有者が収容を)拒否する場合は、前記三十日以内に、その旨をもって民政府副長官に請願することができる。(中略)請願に際しては、正当補償に関する争点のみを決定するものとし、米国は収容宣告の権利を阻止されないものとする。〉

つまり、〈収容宣告を受けた土地は、地主の意思いかんにかかわらず、最終的には米軍側の手に入ってしまうという仕組み〉である(NHK取材班, 2011年,p.40)。

そして「銃剣とブルドーザー」と表現されるほど強引なやりかたで、土地は奪われていった。

ここから、砂川闘争と沖縄を比較するならば、沖縄は砂川闘争とは違い、まず布令が理不尽極まりないものであり、土地の接收の仕方も、住民が抵抗をあきらめるほどの圧倒的力で強引に推し進めていた点で、両者は似て非なるものであることが伺える。

続いて沖縄と横田基地で比較したい点に関東計画についてである。

1972年の日米首脳会談において、「関東平野地域における施設・区域の整理・統合計画」、通称「関東計画」が打ち出された。これは首都圏のアメリカ空軍基地の大幅削減を目的としたものである。米軍の機能を郊外の横田基地に集約させるものだった。立川市の立川飛行場、府中市の府中空軍施設、朝霞市のキャンプ朝霞、ジョンソン飛行場住宅地区、茨城ひたちなか市の水戸空対地射撃場など、6つの人口密集地に存在した米軍基地を横田基地に集約させるものだった(NHK取材班, 2011年,p66)。

当然、地元民の反対は大きかった。しかし、基地を有する自治体に支払われる交付金の根拠となる新たな法律を制定したこと、また、騒音問題の中心となっていた F4 爆撃機・ファントムが沖縄の嘉手納基地に移動となり、反対は弱まった。この関東計画は非常にスピーディに行われた。一見ポジティブな結果をもたらしたように見える関東計画であるが、F4 爆撃機が嘉手納基地に移動したこと、本土の基地が減り、相対的に沖縄の基地負担が大きくなったことを踏まえると、そう単純な話ではない。

以上のことを踏まえると、沖縄の基地問題と横田基地が経験してきた問題は似ている点があるものの、沖縄はより複雑であり、それゆえに現在でも問題が続いているととらえることができる。

それでは、基地問題の比較ではなく、横田基地と沖縄の基地の性質の違いも考えていきたい。横田基地の性質に関しては、2 章でも述べている通りである。そもそも横田基地に現在置かれているのは在日米軍司令部と第五空軍司令部であり、沖縄には陸・海・空軍すべての基地関連施設が存在しているという点でかなりの違いがあると言えよう。すなわちアメリカにとって横田基地は日本に置かれている米軍基地を指揮する重要拠点であるのに対し、沖縄は極東における戦略的にも物理的にも重要な拠点であるという点である。

また、事件の起きづらさでいえば、横田基地は福生という立地のもとで、周りに外出できる場所が多く、都心にも電車を利用して一時間程度で着くことができ、日ごろのストレスなどを発散しやすいという観点から、沖縄と比較したときに軍人による事件は起きづらいのではないかと考える。

## 5章 福生市の取り組み

福生では横田基地と団体や個人の民間レベルでも交流が行われており、大きな成果を上げている。こういった取り組みによっても、横田基地との良好な関係は築かれてきた。

### (1)福生・横田交流クラブ

平成元年3月に発足した福生・横田交流クラブは、基地に居住や所属をしている外国人、これに関連した団体との文化交流を通じ、国際的相互理解を深め、国際親善を促進することを目的としており、現在約100名の会員がいる。

会の行う行事としては、日米親善パーティー、ゴルフ大会、商工会青年部・青年会議所の協力を得て外国人の御神輿や空軍バンド等の七夕祭りへの参加等を実施している(福生市企画財政部企画調整課, 2016年, p.145)。

### (2)航空自衛隊横田基地協力会

平成22年11月に発足した航空自衛隊横田基地協力会は、航空自衛隊横田基地とその周辺住民との相互理解と親睦を図り、航空自衛隊との友好、協力を努めるとともに会員相互の親睦を深め、併せて防衛意識の普及啓蒙と周辺自治体の発展に寄与することを目的としており、現在約220名の会員がいる。

会の行う行事としては、航空自衛隊横田基地との交流事業、視察研修会、各種式典・祝賀会などを実施している(福生市役所, 2016年, p.145)。

### (3)日米友好祭

基地を一般に開放する唯一の催し物で、毎年8～9月頃の土曜・日曜の2日間行われ、多くの若者や家族連れ、航空機マニア等が訪れる。米軍や航空自衛隊の航空機の展示、また、アマチュアバンドの演奏、和太鼓も行われるなど日米の交流の場でもある。平成24年から、航空自衛隊横田基地も参加している。会場には、ホットドッグ、ハンバーガーなどの売店も出ており、毎年約15～20万人の人出で賑わう。

なお、友好祭には車で来る人も多く、基地周辺の交通渋滞や基地の中に駐車場がないため、路上駐車等の交通上の問題が発生している。

このため、市では基地に対し基地内に駐車場を確保するか、できない場合には、公共の交通機関を利用するよう呼び掛けるなどPRを徹底するよう要請している(福生市企画財政部企画調整課, 2016年, p.145)。

### 【友好祭の歴史】

1949年9月20日に第5空軍誕生7年を祝い、地上展示及びエアショーが行われた。こ

の時は、一般に開放する友好祭ではなかった。

#### 三軍統合記念日

1950年代から在日米軍は年に1度、陸・海・空三軍の基地を一般に開放する「三軍統合記念日」を設けるようになった。

陸・海・空軍がそれぞれ別個に記念日を定めて祝っていたのを、1950年に当時の大統領の承認を得て、当時の国防長官が三軍の融和と強調をはかる目的からこれを一つにまとめたからである。

7年後の1957年に、その日を毎年5月の第3土曜日と決めて、アメリカ本土、海外に駐留する米軍施設でもこの1日基地を一般に開放して、それぞれの特徴を生かした行事を行って祝うようになった。

軍事施設という普段閉ざされている基地を一般の人たちに広く開放して、よく理解してもらおうという目的からである。当時の日本は、土曜日が休日のところはすくなかったため、日曜日に行われた。

基地によっては、7月4日の独立記念日に合わせて基地を開放する独立記念祭・カーニバルや8～9月ごろに行う日米親善週末祭、また子供の日として開放しているところもあった。オープンハウスとも言われていた。

後に **Japanese-American Friendship Festival** と呼ばれるようになった。しかし、その日本語訳は「日米親善祭り」、「日米親善友好祭」などと訳された。ここ10年ほどは「日米友好祭」と呼ばれている(20周年誌編集委員会, 2008年,p.40)。

#### (4)福生七夕祭りへの参加

福生七夕祭りは昭和26年から始まったが、基地がこの催しに参加するようになったのは、第10回の昭和35年に米軍等のパレードが行われたことからである。第16回からは民謡パレードが始まり一層賑やかさを増し、ハッピー姿の米兵やその家族達が七夕ダンサーズをつくって参加するようになり、第62回(平成24年)からは航空自衛隊横田基地の隊員も参加している(福生市企画財政部企画調整課, 2016年, p.146)。

#### (5)フレンドシップサークル(日米婦人交流)

公民館の事業として、昭和50年に始まり、昭和59年からは自主的な活動を行い、市民サイドでの交流が行われている。

この事業が始まる少し前に、米軍基地の関東集約(KPCP)が行われ、横田基地に婦人や子どもなど、家族も移動してきたことから、こうした人達にも日本文化の正しい紹介、理解が得られるようにと米側将校婦人達からの働きかけが教育委員会にあり、日米婦人文化交流事業として始まった。

現在は、日本側では市内や周辺の施設見学、伝統行事の紹介を行い、米側ではアメリカの年中行事の紹介や基地内の施設の見学等を行い、相互の交流を図っている(福生市企画財政部企画調整課, 2016年,p.146)。

## (6)上記のほかにも各種の文化的事業やスポーツ等の交流

語学指導を通じて個人的な交流や市民会館等での将兵による音楽会を通じての交流、クリスマス行事に伴う養護施設等への訪問、市内外の行事への参加（さくら祭り等への参加）、ロータリークラブ、ライオンズクラブ、青年会議所等との交流、フロスト・バイト・ロードレース、リトルリーグ、日米の身体障害者の人達とのスペシャル・オリンピック大会、基地内のバスケットボールチームとの日米交流試合等、スポーツを通じての交流も行われている（福生市企画財政部企画調整課, 2016年, p.146）。

## (7)基地内留学

横田基地にあるメリーランド州立大学横田基地分校に基地外の人間が留学できるというシステムが存在する。メリーランド州立大学は、アメリカ・メリーランド州カレッジパークに本部がある。海外 23 か国に 170 以上のキャンパスを持つ。このメリーランド州立大学アジア部で、「電車で米国留学が可能」と話題になったのが横田基地分校である(荒居, 2002年, p.182)。

同大学は、1992年1月から日本人を受け入れ始めた。日本人に門戸を開いた大学の分校はほかに沖縄の嘉手納、青森県三沢市、山口県岩国市の三つだけである。横田基地には兵隊が通学するためチャップマン大学、セントラル大学などが五大学の分校がある。このうち、メリーランドのプログラムは四年制、130単位修めると学士号が取れる。大学開設には『福生・横田交流クラブ』の存在があり、入学に関する広報活動や願書の取り次ぎは、すべて基地まえの株式会社ポニーの社員たちがボランティアで行っている。大学の日本人の受け入れは、当時のチャールズ・L・フォックス横田基地司令官、J・B・デービス在日米軍第五空軍司令官の強い意志で実現した(荒居, 2002年, p.182)。

以上のように、福生では横田基地とさまざまな形で交流をしている。こういったさまざまな関わり合いのなかでも、文化は生じてくると考える。特に前述した日米友好祭は毎年大賑わいであり、筆者の普段利用する駅も、日米友好祭の期間は普段の何倍もの人であふれている。筆者の知り合いにも、わざわざ遠方から日米友好祭に訪れるものがある。これもまた一つの文化である。また、日本にいながらも、留学することができるというメリーランド州立大学横田基地分校のプログラムは日米双方の交流をさらに活発化させることができる施策であると考えられる。そこから、また新たな文化の誕生につながることも大いにありえる話である。

このことを踏まえると福生側だけで横田基地に寄り添ったり、逆に横田基地だけが福生に寄り添っているのではなく、福生と横田基地双方の、インタラクティブな関係が築けているととらえることができる。



## 6章 まとめ

### 6-1 総括 i 論文の流れ

#### 1章 序章

なぜ福生市と横田基地は良好な関係を築けているのか。

- ・ 仮説1 福生がうまく横田基地を受け入れた
- ・ 仮説2 横田基地がそもそも問題を起こすような基地ではなかった

#### 仮説1へのアプローチ

→文化形成の経緯・福生の取り組み方

#### 仮説2へのアプローチ

→横田基地のアメリカにおける位置  
→福生という土地の関係  
→軍人の性質

#### 2章 福生と横田基地の概要

- ・ 福生・・・もともと多摩飛行場がある軍都だった。→米軍基地もなじみやすかった
- ・ 横田基地・・・極東における重要拠点。東京に点在していた米軍施設が徐々に福生に集まった。現在では自衛隊との日米共同利用をしている。→基地返還のプロセス。

#### 3章 福生市のアメリカンカルチャー

赤線・米軍ハウス・商店街・音楽・その他  
→東京にあるアメリカの擬似的「本場」

#### 4章 沖縄の米軍基地

沖縄の基地と横田基地との比較→沖縄と東京という地による差異

比較

## 5章 福生市の取り組み

福生市が横田基地にたいして行ってきた取り組み。

→仮説1につながる

本論文は序章で、福生がなぜ横田基地と良好な関係を築けているのかという点に着目していることを示した。そして仮説を2つ提示した。1つは福生が横田基地をうまく受け入れてきたのではないかとということと、もう1つはそもそも横田基地が問題を起こすような基地ではなかったのではないかとということだ。

そして2章では福生市と横田基地の概要について論じた。ここでは福生がもともと軍都だったこと、米軍施設は徐々に横田基地に集中していったことを述べた。そして自衛隊による横田基地の日米共同利用と東京都による軍民共用化を目指す動きは、横田基地を将来的に返還するためのプロセスではないかということが感じ取れた。

3章では福生のアメリカンカルチャーについて論じた。いくつかの文化を紹介したが、いずれも、独特な経緯をもって形成されていった。そうして、他の地域にはない、東京のなかのアメリカの擬似的「本場」を生んできた。これは仮説の1つ目につながる。

4章では沖縄の基地と横田基地の比較を行った。軍の性質や立ち位置も違ううえに、やはり、沖縄という首都圏から離れた地と東京という地では全く状況が異なることがわかった。このことは仮説の2つ目につながる。

5章では、福生が横田基地に対して行ってきた取り組みを述べた。福生はさまざまな取り組みを行っており、これは仮説の1つ目に通ずるものがあると言える。

### 6-2 総括 ii 論文のまとめ

これまで、福生の基地文化を中心に、横田基地との関係について述べてきた。そこで、冒頭で提示した仮説について考えていきたい。

まず福生と横田基地が良好な関係を築いていることについて、仮説の一つ目では、福生がうまく横田基地を受け入れたことによって成り立っているのではないかと提示した。これに関しては、まず関東計画において、横田基地を受け入れざるをえなかった状況があった。しかしそのことによる法整備ができ、交付金や、基地があることによって町の商店が発展していった事実もある。もともと発展していた産業がなかった福生にとって、赤線の存在、米軍ハウス建築の需要など、横田基地の存在によって発展していったものが多くある。そして、赤線にしても米軍ハウスにしても、元は米軍兵士ためのものではあったが、次第に日本人が利用するようになり、紆余曲折を経ながらも現在まで存在する文化となっている。これは、3章でも少し触れた一つ目の段階の文化の受容が発展していった形である。そして前提として、何度も述べてきたが、福生はアメリカの擬似的「本場」なのである。これは、もはや福生に住んできた人よりもむしろ、外部の人々が強く感じてきたことではないだろうか。赤線やディスコ文化、テーラー、米軍ハウス、どれをとっても

根底には擬似的「本場」、真正性を持ったものであるという認識のもと、福生内外の人々から愛されてきた歴史がある。これは福生が狙って擬似的「本場」を現出させていたのではなく、偶発的に芽生えたものである。

そして二つ目の段階として、福生がアメリカの擬似的「本場」であることを前提として、基地というものをネガティブなものではなく、積極的に、前向きにとらえ商品化することで新たな文化が誕生してきている。この二つの段階を経て現在の福生は存在する。この点を踏まえると、偶発的要因を受けながらも、福生がうまく横田基地というものを受容してきたからこそ、現在のような福生と横田基地との関係性が誕生したと言える。

仮説の二つ目は、そもそも横田基地が問題を起こすような基地ではなかったからこそ、福生と良好な関係が築けてきたのではないかというものだ。当然、基地という性質上、住民と争ってきた歴史はある。赤線が活況だった時代では、議会で米兵のふしだらな行為が挙げられたりすることもあった。しかし、沖縄の米軍兵士の起こしてきた事件と比べると、横田基地の兵士は問題を起こしてないにとらえることができる。原因として、4章でも述べたが、沖縄に駐屯しているのは海兵隊で、横田基地に駐屯しているのは在日米軍司令部や空軍という違いも少なからずあるだろう。アメリカにとって横田基地は在日米軍司令部も置いている点から、在日米軍を指揮するうえで重要な拠点であることは間違いない。当然不祥事も少なくなるだろう。そしてもう一つ原因として考えられるのは、沖縄が県全体に基地関連施設が点在しており、なかなか外出する先がないのに対し、横田基地の場合は立地的に外出しやすいという点である。福生周辺にも商店街があるうえに、JR 中央線を使えば新宿や六本木などにも 1 時間強で行くことができる。もともと六本木や新宿は福生と似ているように、米軍人用の宿舎があったという経緯もあり、米軍人はしばしば足を運んだ。つまりはストレスの発散口が明確に存在しているということだ。これは兵士のメンタリティに非常に大きく関わる問題であると言える。そしてもう一つ大きな理由がある。それは、横田基地が数十年の時をかけ、日米共同使用、そして軍民共用化を目指しているという、どこかしらいつか返還してもらおうという考えが人々のなかにあるからである。

以上の点を踏まえると仮説の二つ目は、横田基地の性質、そして東京の福生というローカライズされた地にあるがゆえ、沖縄に比べて問題が起きづらい環境だったと考えることができる。

ここまで、福生と横田基地の関係性を文化的な観点から主に考察してきた。受け入れざるをえなかった環境のもとで、結果的に基地の影響で発展してきた福生。他の在日米軍基地はいくつかあるけれど、司令部のある横田基地だからこそ、今の福生との関係性がある。福生だったからこそ、横田基地だったからこそ、良好な関係が築き上げられてきたのである。

### 6-3 謝辞

最後の最後までしっかりとアドバイス等の指導をくださり、浦野先生には大変感謝して

います。ありがとうございました。また、私の発表に対しての意見をくれた浦野ゼミの同期や後輩にも感謝しております。ありがとうございました。

#### 【参考文献】

- あびる義明『東京タイムマシン1』集英社、1998年  
新井智一「東京都福生市における在日米軍横田基地をめぐる“場所の政治”」『地学雑誌』  
2005年  
荒居直人『ゴーゴー福生』クレイン、2002年  
東京都都市整備局基地対策部『軍民共用化に向けて』東京都、2017年  
東京都都市整備局基地対策部『東京の米軍基地』東京都、2016年  
NHK取材班『基地はなぜ沖縄に集中しているか』NHK出版、2011年  
難波功士「米軍基地文化」『叢書 戦争が生みだす社会Ⅲ』新曜社、2014年  
福生市企画財政部企画調整課『福生市と横田基地』福生市役所、2016年  
福生市企画財政部秘書広報課『福生市 市政世論調査 報告書』東京都福生市、2015年  
福生市史編さん委員会『福生市史 下巻』東京都福生市、1994年  
福生市史編さん委員会『福生市史資料編 現代』東京都福生市、1993年  
福生市・福生市商工会・東京都商工指導所『平成8年度 福生市国道16号線沿 商店街診断報告書(横田商栄会：福生市武蔵野商商店街振興組合)』東京都商工指導所商業部、1997年  
吉見俊哉『親米と反米―戦後日本の政治的無意識』岩波書店、2007年  
UZU ホームページ <http://uzu69.com/history/>  
20周年誌編集委員会『福生・横田交流クラブ 創立20周年誌』2008年